

“お客さまと企業、に終わらず、 人と人をつなぐ供養産業の価値に目覚めて

(この記事は『やくしん』2021年2月号、「経営に生きる、経営に活かす(第14回)」の記事を転載しております。役職等は当時のものです。)

有限会社川本商店 代表取締役 川本恭央さん



創業九十二年を迎えた有限会社川本商店。
神仏具・墓装用品の製造販売事業を全国展開する。
社会の変化、人びとの価値観やライフスタイルの多様化により、この業界にも変化が求められている。
商品売るだけではない“供養産業”としての新たなあり方に挑んでいる。

「もの」を売るだけではない

供養産業の役割

神仏具・墓装用品の製造販売事業を全国展開する有限会社川本商店。埼玉県川口市のショールームには仏壇をはじめ、花立や墓参用の手桶、香炉皿、燭台など数多くの商品が並ぶ。多様化する人びとの価値観やライフスタイルと共に近年は葬送や埋葬の形も変わってきた。川本商店では遺族の思いに寄り添って仏具や墓装用品を販売するほか、故人とのこれからのつながり方についての相談にも応える。

「祖父と親父がよくこの業界を選んでくれた。今では本当にそう思っています」。創業は九十二年前、祖父・市蔵さんが東京・靖国神社の儀式に使われる陶器などを納めたこ



とに始まる。神仏具陶器の製造卸業として起業し、港区赤坂に本社を構えた。一九七二年に父・正さんが二代目社長に就任し、墓装用品の製造販売で事業を全国展開。現在も売り上げの八割を占める「多種多様な墓装用品」で評判を得た。立正佼成会のご宝前用の仏具を納めた時期もある。近年は佼成霊園の萬霊供養塔などの建立にも携わった。

正さんは仕事で全国を駆け回るだけな

く、佼成会や町会、商店街、消防団の活動にも奔走し、家にいることはほとんどなかった。多忙を極めたせいか、四十六歳の時に脳出血を起こし、右半身不随となった。それでも川本さんの母・順子さん（80）に支えられ、七十歳まで社長を務めた。

自分ごとではなかった家業

父に抱いた反発心

正さんの長男である川本さんは、大学卒業と同時に入社した。家業を継ぐ決意は薄く、「ずっと自分ごとではなかった」と当時をふり返る。「偉大な親父が癪でした。怒ることもない。口うるさく言う人でもないから、余計にひねくれ、反発した。俺は親父とは違うと、ずっと逃げていました」。二〇〇二年、正さんの他界後、社長を継いだもののその自覚に立つことはなかった。

転機が訪れたのは四、五年前だ。仕事から逃げ続け、家庭までも疎かにしていた川本さんに、祖父の代から川本家を見守り続けてくれた近藤江津子さん(元墨田教会長)と当時の坂井久予港教会長が手を差し伸べた。真剣に自分を信じ、思ってくれる存在を心から有り難いと感じた。坂井教会長はただじっと話を聴いてくれた。自分を否定し続けていた心に灯りがともり、ものの見方を変える信仰心を学び救われた。そして、家業である“供養産業、でも同じことができる”と気づいた。

墓装用品という「もの」を売ることをとおして、遺族や故人に心を寄せる。供養産業を仕事にするうえで、信仰をもつことの重要性も感じた。

「たとえば、亡くなったお父さんについて子どもさんに聞くと、お酒好きが嫌だったなどネガティブな気持ちを吐きだすことがあります。ですが、じっと傾聴していると次第に父親の良いところを語りだします。温かい思いがあふれてくるんでしょう。『お父さんを大切に思っていて立派ですね』と伝えていきます」。心を寄せ、認める。仕事の価値に気づいた。他人ごとだった家業が自分ごとになっていった。



従業員との会話を大切にしている。社長室のドアも常に開けたままだという。

従業員が

長く活躍できるように

現在、グループ全体で従業員は五十四人。このうち六人が六十五歳の定年後も嘱託として勤務する。最高齢は八十歳だ。父の代から勤務する人がほとんどで、足りない自分



ショールームには仏壇・仏具、装葬用品が数多く陳列されている。

が経営者になっても変わらず会社に貢献してくれることに感謝の念は尽きない。

いま、川本商店の社長として大切にしているのは適材適所の人材配置だ。従業員が希望する限り、年齢を問わず働ける環境を提供したい。以前は外注していた手桶に貼付する家紋などの印刷を内製化したのも、高齢従業員の身体的負担を軽減しつつ、活躍できる場をつくりたかったからだ。

一方、社長として従業員の結婚式や葬儀など人生の節目に立ち合えることに感謝する。若い单身者には社員寮への入寮を勧め、貯蓄を促す。高齢の单身者とは死後事務委任契約を結び、会社が家族となって最期を見送っている。

実は長男・雅由さん（27）は、従業員の社葬に参列したことでこの業界や会社の素晴らしさが分かったと言い、大学卒業後の就職先に家業を選んだ。川本さんは長男が業界や会社を理解してくれたことがとても嬉しかった。

つながりをつくる

つながりを広げる

二〇一五年、川本さんは人と人が直接出会える、つながるための新たな事業に挑む決心をする。そして、赤坂の本社ビル一階に「終活カフェ かのん」をオープンさせた。人と人の縁づくり、人と人生のエンディングに関わる事業者などとの縁づくりの場だ。僧侶や石材業者を招き、来店客とコーヒーを飲みながら何気ない会話をしてもらおう。店主である妻の幸映さん（62）も客の話に耳を傾ける。

客の多くは近隣に暮らす高齢者だ。皆、アットホームな雰囲気と心に許し、自身の生活や人生を語り始める。そして、「最期」のあり方について理想や不安を吐露するという。

「カフェという空間で会うことで、お客さまと企業の関係ではなく、打ち解けた会話ができます。『身内』のようになれるんです」と川本さんは笑顔を見せる。商談になるケースは少ないが、「最期を頼みたいから」と離れて暮らす息子を連れて来店する夫婦もいる。そうした関係を築けるのが何より嬉しい。

二〇二〇年、新型コロナウイルスの感染拡大によって墓装用品の売り上げが落ち込み、収益性の低いカフェの閉鎖も頭に浮かんだ。が、近年の単身世帯の増加、さらにコロナ禍の自殺者の増加を思うと、このような時だからこそ人と人がつながる場が必要と感じ、存続を決めた。



路上生活者を支援する「ひとさじの会」の活動。おにぎりを手渡し、じっくり話を聞いて縁をつなぐ。

「調和・利他・幸福」を

信条に

カフェの他に、寺業再興事業（名称・「みんてら」）を展開している。プライベートでは、東日本大震災の支援を通じて交流を深めた吉水岳彦・浄土宗光照院副住職が事務局長を務める、路上生活者などへおにぎりを手渡し、話を聞く「ひとさじの会」でボランティア活動にも励む。佼成会では「六花の会」で仏教精神を基盤とした経営者のあり方を学ぶほか、「地域共助ネットワークの会」の活動にも力を注いでいる。同会は所属教会の地域外に居住する会員をその住所を包括する教会や会員とつなぎ、更なる法縁を育むものだ。高齢会員、中でも単身で暮らす高齢サンガに思いを寄せる。

「あれこれと手を出して」と照れた様子を見せるが、川本さんの思いは一つ、人と人をつなぐこと。法縁というつながりによって救われた自身の体験が原点だ。

会社の事業展開と佼成会の教えの実践に垣根はない。川本商店の経営理念は「調和・利他・幸福」。自身の信条でもある。これからも、このことをただひたすらに、あらゆる表現を用いて追い求めていくのみだ。



●かわもと やすお

1965年、東京都生まれ。港教会所属。大学卒業後、有限会社川本商店に入社。2002年から代表取締役。佼成会の仏具の製造販売、佼成霊園の萬霊供養塔の建立や聖霊殿の改築にも携わった。一般社団法人日本尊骨士協会代表理事、一般社団法人PLAY for (ONE) 理事。一般社団法人日本看取り士会認定 看取り士。保護司。大学生時代から佼成会の教えにふれ、港教会の青年部、壮年部で活動。「青年の日」実行委員長などを務めた。